

緑川ゆき「螢火の杜へ」精読あるいは緑川ゆき論



緑川ゆき「萤火の杜へ」精読あるいは緑川ゆき論

目次

序 六

1 夏はめぐる 八

発表当時の評判（「2ちゃんねる」から）／

「アツイヒビ」とスイカ／陰影のベタ／狐の面

2 恋はめぐる 二〇

「あかく咲く声」 視点から世界へ／

「萤火」への道 恋愛色から恋愛モノへ

3 心はめぐる 三一

抱擁の修辞法／溢れるギンの感情／

その後の「萤火」

あとがき 四一

序

現在（二〇〇八年八月）連載中の「夏目友人帳」が緑川ゆきの代表作であることに変わりはない。アニメ化もされ、マンガのガイドブック類にも名を挙げられるようになり、地味な作風で堅実にキャリアを積み上げてきた緑川ゆきにとって、は幸甚だと思われる。

さて、彼女のデビュー作からこれまでの作品を並べて見るに、大きな転機となり、彼女の名を確実に刻み付けた短編があることを見落としてはならない。今回精読してみる「萤火の杜へ」である。はつきり言おう、これは名作である。緑川ゆきの代表作と言われて真っ先に挙げるべき作品でもある。「夏目」ではなく「萤火の杜へ」をなぜ採り上げるのか、そのような疑問も、この作



品が緑川ゆきにとつてどれほどの挑戦であり、デビューからの軌跡と「夏目」に連なる作品群の中心に居座るほどの衝撃で

あつたかが、これから展開されるであろう作品論及び作家論で解消されるに違いない。

では、知つてゐる人も知らない人も「螢火の杜へ」あらすじ。

ある夏。田舎のおじいさんの家に遊びに来た六歳の竹川螢は、祖父から絶対入ってはならぬと言われていた山神の森の中に迷い込んでしまう。彼女を見つけたのは、ギンという妖怪とも幽霊ともつかぬ青年だった。人に触れてしまうと消えてしまう、そんな危うい状態の彼と螢の夏だけの交流の始まりだった。成長する螢は、ほとんど成長しないギンと背格好が近づきつつあることに驚きつつも、彼が本当に人ではないという確信も生まれる。ギンは人間ではない。彼女にとって触れることの出来ない存在は、いつしかギンにとつても螢が大事な存在になつていくことで、抱きしめ合えない・手さえ繋ぐことが出来ない切ない関係に発展していく。高校生になつた螢をギンは、ある夏の日に妖怪たちが催す夏祭りに誘つた。触れ合つてはならない最後のデートの始まりである……

本稿は、「あかく咲く声」から一貫して緑川ゆきを応

援し続けている一ファンによる熱烈な「螢火の杜へ」論である。

（本稿はその性格上、作品の結末についても触れていることをあらかじめご了承願いたい。文中の引用は、白泉社から出版されている緑川ゆき作品から行っている。なお、「あかく咲く声」については、白泉社版全三巻が絶版であり、現在入手のしやすさという点に考慮して白泉社文庫全二巻からの引用とした。他に、同じく白泉社のジエツツコミックスから、よしながふみ「大奥」二巻からも引用している）

1 夏はめぐる

発表当時の評判

「螢火の杜へ」（以下「螢火」と略す）が発表された当時（二〇〇二年）の私は、秋ごろにやっと購入した短編集「アツイヒビ」に衝撃を受け、緑川ゆきという作家が自分の中で突如膨れ上がり存在感を発露した時期である（単行本「アツイヒビ」は「螢火」掲載の約一月前に発刊されていたが、私はそれを知らずにだいぶ遅れて手に入れた）。遅まきながら2ちゃんねるの少女漫画板で緑川ゆきに關わるレスを雑誌スレで確認していた私は、絶賛が続くレスに期待が高まったものである。ここに当時のララスレ（「螢火」が掲載された雑誌のスレッド）の緑川ゆきに關する一部のレスを紹介しよう（ただし、スレッドは横書きのために、一部縦書き用に改変している）。

895 02/06/08 10:28

ララプラ√緑川ゆきの「螢火の杜」良かったッス。

ラストが切なかった……。

まだネタバレ解禁じゃないですかね？（後略）

896 02/06/08 10:31

今回緑川さんのがすごく好き。切ないんだけど優しい感じがした。

900 02/06/08 12:26

螢火おもしろかったー！！

私も緑川さんを見直しました。

今までなんとも思ってたけど、ファンになりやう。

もしかして蟲師の影響あり？とは思ったけど。

901 02/06/08 13:14

緑川さん、ほろりと来てしまったよ……

なんつーか、今年の少女漫画短編賞金賞って感じです。

個人的に。

902 02/06/08 13:24

うーちよつと復めすぎかもしれないけど、最近昔の少女漫画ばかり読んで、今の少女漫画を見放しつ

つあったんだけど、螢火を読んで、まだまだ捨てたもん

じゃないな、と思いました。少女漫画はまだまだい

る！皆ががんばれ（投稿者へ）

924 02/06/10 03:32

緑川さん、ここで絶賛されて「ほんとかのう」とあま

り期待しないで読んでら

ヤラレタ・・・ほんとに良かった。

926 02/06/10 10:57

オレも蛍火が面白かった。やっぱり、言葉のセンスいいです。ダブルミーニングなラストの一言で、泣いてしまった。でも、この作家さん、好きでずっとチェックしてるんだけど、モチーフが少ないのが少し気になる。

今回も「あかく咲く花」（というか、初期の短編の頃からのテーマ）の変奏って感じで、まあ、今、面白いからいいか。

929 02/06/10 16:28

緑川さんの、立ち読みで目がうるんじやったよ。やばかった。

最近はお買わないで立ち読んでばかりだったんだけど、今回はこれ何回も見たいから、帰りに買って帰ろう。

930 02/06/10 17:03

>929

私もだ！途中で泣きそうになったんで買って家でゆっくり読むことにしたよ。

コミックスになるには時間がかかりそうだし

わ・・・。

937 02/06/10 20:27

緑川さん、良かった。うるうる来ちゃいました。あのお面越しのキスシーンが切ない・・・。

941 02/06/10 21:34

緑川さんは最初の方で結末予想できるんだけど、いやーよかったですー。びっくり。（後略）

ここから次スレ

7 02/06/10 22:22

（前略）蛍火・・・すごく良かった。まだ6月だけど、短編では今年のベストあげたいくらい。「世にも奇妙な事」かなんかであうまく映像化（ドラマ化）してくれないだろうか。

10 02/06/10 22:57

わたしもだまされたつもりで買ったけど緑川さん、ホントに良かった。

風呂で読んで、涙ぼろぼろ。久々いい読後感でした。

11 02/06/10 23:13

風呂で読むには重いよね、うちも読んでるうちに端っこが浸ってるときあるよ

緑川さんのは温かさが伝わってくる（後略）

12 02/06/11 00:11

（前略）緑川さんのほんとよかった。凄い雰囲気が好き。漫画で泣かされたの久し振りです。DXに来てから凄く良くなったね、緑川さん。

この人の「救い」の形がなんか好きだ。

13 02/06/11 00:27

救いのカタチって名言だね！

16 02/06/11 01:04

私も緑川さんのためだけに買ってしまったー。

（中略）

緑川さんは短編集も買ったけど、柱など呼んでいると「赤く」の次の連載は単行本化しないつもりかな？

本誌読んでないからかなりくやしい。

今後も単行本化されないものがあるかと思うと他に目当てがなくてもデラを買おうしかないじゃないか。

19 02/06/11 09:12

緑川さんの「堂火」にノックダウンさせられ、短編集を探すがナッシングー！

どこにあるんじやー！

21 02/06/11 09:51

堂火良いよー。

何回読んでもラスト4P前で泣いてしまう。

あの間が絶妙でたまらん。今回の作品で、今までに培われた緑川さんの持ち味が昇華されたように思います。

でも、次の作品もこれと同じクオリティを求めてしまうんですが、なんか期待するのが怖いような・・・

22 02/06/11 09:58

評価がいいと2ちゃんじゃとは伸びないからねー

ここで見守るのもいいんじゃない？

緑川さんの主人公の女の子の一生懸命さが他の作家さんの依存型、モテモテ型との違いだろうか・・・

冒頭の殴られても強いとことかにミョウに惹かれる

23 02/06/11 10:04

〜で緑川さんの女性キャラって打たれ強いし辛抱強いよねー。でも、話に合わせて個性変えてる節がありますよね。何故か印象に残る。

（後略）

24 02/06/11 11:49

「堂火」冒頭の「本当に人間じゃないようね・・・幼

幼

い子を棒で殴るとは・・・」

ってとこ、私も好きです。笑った。

そしてラストは涙。やっと抱き合えて本当に良かったわ。

心に響く言葉がとても多い。

「絶対私に触らないでね」

「飛びつけばいい 本望だ」

せつな—————!!!!!!!!!

26 02/06/11 15:10

蛍火は、消えちゃうんだろかなと予想しながらも最後は何らかの形で戻ってきてくれないか、なんて期待してしまっただ。

戻ってきたらこんなに評判良くなかったかな・・・？

27 02/06/11 15:28

はかないから美しいのです。

34 02/06/11 23:55

このスレを見てララタしぶりに買いました。

「蛍火の杜へ」良かった!!!

夜中だったので声を殺して嗚咽しながら読んだ。何度

読み返しても良い。(後略)

35 02/06/12 00:35

蛍火、よかったけどそこまでかなあ・・・

あーいう不思議設定は狙いまくりだし、絵上達しないしさあ・・・キャラいつもTシャツだし。

服装のバリエーション無すぎだよー

夏の暑さ、冬の寒さが伝わってくる雰囲気は好き。

画面白すぎだけどね。

36 02/06/12 00:55

たとえ狙いでも、あの「間」は緑川さんだから出せたのかなーと思う。

V夏の暑さ、冬の寒さが伝わってくる雰囲気は好き。

禿同。今回出た短編集でもそれがよく出てる。

なんとというか流れるような時間の経過が、切ないんだ

けど心地良かった。>蛍火

38 02/06/12 01:40

緑川さんの感受性の質みたいなものかな

そういうところが清水玲子と確かに似てる気がする

蛍火は何度も読みたいたいしずっと心に残りような感覚があった

そういう話を描いてる作家さんは久々だから反響大き

いんだと思うよ

大きく良い方向に育ってる実感あるよね 次回作も期待

39 02/06/12 02:28

>>35

絵は上達してるよ。デッサンとかは、「あかく咲く花」から短編集、蛍火と通して見ると上手くなってるのが解るし。っていうか、初期は登場人物が骨折状態なん
で…(汗)

あと、あのタッチはそのままがいいと思うから、無視。
服装は同意だけどいいや、あの人の描く涼しげな服好
きだし。

43 02/06/12 10:33

緑川さんの絵って、線がへなへなしてるのが今まで苦手だったけど

いざという時の表現力はあるな、と今回思った。

「私もよ」のシーンの蛍とか、顔は見えないし決して上手い絵ではないけど凄く伝わってくるものがある。

微妙に萌れた持ち味とでも言うのか…

引用というにははばかれるほど長々と引用してしまったが、これらのレスには緑川作品を語る上で外せないキーワードがいくつもある。そのひとつが夏の表現なのである。

レス中にもあるとおり、緑川作品の季節感には、常に夏の印象がつきまといっている。黒いベタを多用した陰影の強調、森の中の茂みも黒やそれに近い網掛けによつて鬱蒼とした感じを醸している。特に木々の葉を黒くして背景に空(単に白のときもある)をまぶした描写には、暑さと木陰の暗さの一体感がある。

「蛍火」の舞台は、この夏の印象が意図して選択されている。単行本「蛍火の杜へ」は四つの季節を意識された四つの短編から構成されているが、各短編とも雑誌に掲載された季節に合わせたものでもあり(「蛍火」は平成一四年ララDX七月号に掲載された)、個人的にはリアルタイムで読むべきだった短編かもしれない(私は雑誌をほとんど読まない不届き物なので、「蛍火」は本になってから読むことができた)。

—ともなく、夏をどう表現しているか、という視点から「蛍火」についてまず考えてきたい。

アツイヒビ

緑川ゆき



下図は冒頭で
ある。「ミーン
ミーン」という
おとなしい擬
音（蝉の鳴き
声は「萤火」で
も描かれるが、

「アツイヒビ」とスイカ
「アツイヒビ」は「あかく咲く声」連載終了後に発表さ
れた短編（平成一三年ララDX九月号掲載）であり、
「萤火」の約一年前に描かれている。「萤火」の前に描か
れた夏として、まずはこの作品に触れておきたい。
簡単なあらすじ。高校生の国吉は、橋で偶然知り合っ
た池田が生徒手帳に記した「殺人計画」を知ってしまった。
池田の計画の正体を突き止めようと奔走するも、彼
について調べていくうちに、池田の家庭環境が明らか
になると同時に彼が抱えている問題の大きさが国吉に
とってはとうしようもないことがわかってくる。友人
として池田の力になりたいという思いは、夏の暑い盛
りのある日、頂点を迎えた……

全く強調されることがない）に橋の上でアイスの棒を
加えた国吉が、川の中で何かしている池田を見つける
場面である。蝉の鳴き声と夏服から、季節が察せられ
る。ニコマ目の真っ黒なベタによる葉陰が強烈な日差
しを予感させてもいる。

だが「アツイヒビ」の舞台が夏であることを象徴して
いるのは、背景ではなく小道具であるスイカだ。スイカ
を妹と仲良く食べる国吉にとって、それは夏の風物で
しかない。四人家族の国吉にとっては、なんの不思議も
ない一個のスイカ。だが、長らく母子家庭だった池田に
とって一個分のスイカは、母と二人では食べきれない
ほどの量であり、スイカを買って帰る親の姿というも
のが、彼にとって憧れであったのか、という一面がのぞ
かれる。



殺人計画が
書かれた生徒
手帳を取り返
そうとする池
田と、事の真
相を知りたい

国吉、両者の思惑は家庭の違いによって縁取られる。図1-1はスイカを持ち帰った国吉の父である。家の中に入る台詞回しは平凡だろう。直前に国吉がスイカを食べる場面を描くことで、また親がスイカを買ってきた、とぼやいているかもしれない子供の姿が思い浮かぶ。暑さをしのぐ手段としてはなく、家族みんなで食卓を囲んで食べる情景が、スイカには込められている。

一方の図1-2は池田の母がスイカを持って帰る場面である。「丸ごと買った」「三人で食べよう」と子に笑いかける母だが、わざわざ「丸ごと」「三人」という単語を用いなければならぬほどの珍しい行為であったことが伝わってくる。だが、池田の本心は別のところにあった。「殺人計画」の真相が明らかになるくだ



↑ 1-1
↓ 1-2



りと合わせ、池田が母のことをどう思っていたのかが、直後にはつきりする。

義父との関係に悩んでいた池田も、母にとっては善い再婚である。母の笑顔のためなら、殺人計画という戯れさえ許容する。それがスイカに象徴されていた。実際、スイカは固くもあり、いと簡単に割れもする果物である。スイカを割ったときというものは、思いのほか罪悪感が伴うものである。どうせ割って食べるんだからいいじゃん、と粋がったところで、包丁を入れて食べやすい形に施すことは、それだけで人への思いやりが込められている。物語は、スイカが割れた場面に、池田を傷付けただけでなく、彼の家庭さえ壊したものは、池田を傷付けただけでなく、彼の家庭さえ取り返しのつかない事態に追い込んでしまったことを暗示させる。

しかし、事態はそう簡単ではなかった。「アツイヒビ」の肝である。暑い日々、厚い輝（ヒビ）……タイトルから連想される言葉の意味は読者それぞれあるけれども、池田が大切にしていた母と

の関係に輝が入ってしまった、気持ちに隔たりがあったことに衝撃を受けている彼の姿が、国吉に殴られて鮮明になる。母が再婚したのは、わが子が自分と二人っきりでは寂しいからではないか、という考えもあってのことだろう。だが子にとってみれば、母と二人で十分だった。スイカは一個も必要なかったのだ。図1—1は、家族の団欒を想像する池田が、黙って去っていくとも読めた。だが、終盤で彼の心が詳らかになると、実はあのときの池田を支配していたものは、母との二人の団欒であり、新しい父がいない頃の食卓だったのかもかもしれない。ダブルニーミングは、ミステリー好きの作者ならではのであるが、ひとつの場面に複数の意味を与えることで、物語の深みが一層増していくことになる。

陰影のベタ

夏を演出するにはいくつか典型があるだろう。「アツイヒビ」のスイカや周囲に響き渡る蝉の声、暑い季節につきもののアイス等の食べ物、高校野球のテレビ・ラジオ中継、プール、海水浴。環境から実生活まで、いろいろ



冒頭の「螢火」

の幅を狭くした。不自由な一方で、短編としての利点も生まれる。夏を単純化できるからである。

冒頭一コマ目の黒いベタに重なるモノローグと、続く山の景色「山神の森」の描かれ方が、この物語における夏であるという宣言がなされる。トーンではなくベタや斜線を中心に重なることで山々の緑が印象付けられる。もちろん黒は強烈な日差しを受けて出来る影でもある。蝉の声が聞こえてきそうなほどの景色は、おどろくほど静寂に包まれている。「ミーンミーン」は遠慮がちにコマの隅に描かれる程度で騒々しさを主張しない。

主人公・螢の登場は蹲って泣いている場面からである。彼女に近づいていく描写を最初から振り返れば、二

ろと表現する手段が転がっているものだ。「螢火」は、舞台をほとんど森の中に限定したことで、演出

コマ目の山の俯瞰↓森の中・蝉の音が漏れてくる↓木の上からの構図で描かれる蛍と、一コマ目の異様さが際立つだろう。明らかに過去を振り返っている言葉。これはラストの描写と対を成す演出であり、この黒いベタがただのモノローグの背景でないことがはっきりしてくる。というのも、その後のモノローグは四角に囲まれているいたり、読みやすい空間に置かれていたり、白抜き文字は一切現れないからだ。黒いベタと蹲る蛍・つまり俯いて暗くなっているだろう表情・迷子になって悲嘆に暮れているのだから、容易に想像できる子供の泣き顔は、ラストの顔を上げた蛍と黒いベタの白抜き文字のモノローグとともに、蛍とギンの出会いの物語を挟む形で構成されている。当然、どちらの蛍の目にも控えぬながら涙が浮かんでいる。涙の意味が最初と最後で違うのは言うまでもないが、黒を最初に印象付けることで、そこから連想される森の中の影を強調し、舞台の環境を単純化（記号化と言い替えてもいい）してしまうのである。

以降の背景には木の陰だと思われるトーンを貼ったりするだけいい。夏の森の中という刷り込みが果た

されれば、あとは読者のほうで勝手にここはそういう場所だと決め付けてくれる。

物語中に占める蛍の年齢も無視してはならない。表紙を含めて五〇頁のうち、二二頁が幼少の蛍を描いているが、背の低い蛍は、ギンを見上げて会話することになる。よってギンの描かれ方は、蛍が見上げた世界と重なることになる。地元の住民から畏れられている森の中とはいえ、鳥居や地蔵があり、人の手が加えられている山である。原生林とは違い、人によって整備された山の中は、思いのほか鬱蒼としていないものだ。蛍は、視界の先に木々の間から差し込む光を受けることが出来るし、そこに立ちふさがるかのようなギンを捉えることもある。冒頭の俯瞰から森の中への視点移動も木々の隙間があるから、というのはいじつけだが、小さな蛍と背の高いギンという印象付けもここで強く行われることで、後半の成長した蛍の描写に大きな変化をもたらし、蛍の描写の幅を広げることになる。

二人の対話を描くとしても、ギンは下に顔を向け、蛍は顔を上げる姿勢になりやすい。どちらかのキャラクターに視点が合わせるにしても、ギンならば地面が・



八頁目 1~4 コマ目

螢ならば空が、よく見え
るといふことだ。二人と
も影が視界を捉えろだ
ろう。八頁目が象徴的
だ。お互いが見詰め合う
場面だが、狐の面を被っ
ているギンの目線が曖
昧なために、どこか不気
味の面と、光がギン自らに遮られたために影さす表情
の螢。どちらと同じ影だが全然意味が違う。同じトーン
でも雰囲気や前後の文脈で込められた意味を微妙に変
えるのは、冒頭とラストのベタの対比同様に作者の得
意とするところである。「アツイヒビ」で魅せたダブル
ニーシングの演出は「螢火」でも上手く生かされている
と思う。

もともと派手さのない絵柄である。緻密な描写でも
なければ特異な描線でキャラクターを炙り出すわけでも
ない。むしろストーリーの意外性やキャラクター設定
を生かしたエピソード作りで物語を盛り上げる向き

味なために、どこか不気
味の面

がある作家だ。絵そのものによる表現力となると、やは
り弱い。「あかく咲く声」で魅せた暗示によって世界の
見え方が劇的に変化するというような、ある場面に複
数の意味を込めることで緻密さを補う演出は、その後
どんどん洗練されていくわけだが、「螢火」でも、その巧
みさは十分に堪能できる。次は、それについて考えてみ
る。

狐の面

ギンの容貌の一部として思い出されるのが狐の面だ
ある。発端としては「あかく咲く声」の番外編のひとつ
である川口編の一場面が考えられる(左図)。幸島は警
察の捜査に協力しているときは狐の面を付けている



が、その面の由来が語られる。この話の元ネタは調べたけれどもわからなかった、作者の創作だろうか。ともかく「螢火」でギンが被る面とよく似ている。特徴としては額の赤い花だろう。魔除けの面だと説明され、その徴が赤い花だという。おそろく毒性を持つ彼岸花だろう（ちなみに、彼岸花には多くの異名があり、そのひとつに「孤花」がある。あるいは捨の可能性もある）。未成年の辛島が犯人に顔を見られないために、という表向きの理由があるとはいえ、川口と辛島の接点でもある狐の面は、辛島にとっては大切なお守りである。

「螢火」においてこの面は、キャラクターの表情が隠されることで、どんな顔なのかを印象付ける働きを与えられている。いつも面を付けているギンは、螢がおそろする面を取ることで、初めて表情が明かされた。「フツーだろう」と語るギンは、こうでもしないと妖怪に見えないだろうと説明するわけだが、この時の彼の表情は再び面によって覆われてしまう。

劇中では、かようにしてギンの表情は隠され続ける。彼が何を考えているのかが判然としない。代わりのように彼に思いを寄せていく螢の表情がモノローグとも

ども描写され、感情移入を促す。

ギンが面を被り続けている理由はいろいろと推測できる。個人的な意見を書いておこう。

高校生になった螢にギンが語る自らの生い立ちは、とても短い一節である。赤ん坊の頃にこの森に捨てられたらしい。これが彼の人としての生の全てである。そのまま死んでしまうとところを山神様の憐れみによって「いつまでも成仏しない幽霊のよう」な存在としてさまよい続けている。

螢が幼い時、ある妖怪がギンに触れたら食ってやると脅すと、ギンがくしゃみをして妖怪を追っ払う。妖怪として人を怖がらせつつ、人に関心がある妖怪たちである。彼らの矛盾した心理は、終盤の妖怪たちの夏祭りでも明示されている。人の真似をした戯れだ。だが、ギンは何者でもない存在である。面がなければ彼は人の子に見え、面を付ければ人から恐れられる。どちらでもない存在。ギンは妖怪の真似をすることで、妖怪たちと生きていく道を選んだ。そして、人と触れ合うことは出来ないけれど、妖怪ならばそれが出来る。誰からも抱きしめられた記憶がない。親の愛情さえ知らないと言っ

まうと陳腐な気がするけど、そんな親ひいては人そのものを遠ざけたい気持ちと、それでも人と触れ合いたい気持ちとが矛盾したまま同居していた。彼のあやふやな存在感は、心理までもあやふやにしていた。

何を考えているのかわからないキャラクターは、後に短編「まなびやの隅」で学校を舞台にすることで発展させられることになる。森の中から学校を舞台にすることで身近な設定とし、先生と生徒の関係を触れ合っているのではない関係・もし関係を持てば先生が処分を受ける、という「萤火」をセルフリメイクしたかのような・換骨奪胎した設定である。そこでは、いつも無表情で生徒に接する先生に次第に心惹かれていく女生徒・かな子の視点から、彼が何を考えているのか・私も生徒の一人としてしか見られていないのか、と思いの悩む



（夏載）姿が描かれる
「収載」（彼女が当初
隅巻先生を「鉄仮
のら先生」と呼ぶほ
び帳「面」と呼ぶほ
な人どである）。
「ま友」の目「萤火」との違

いは物語の時間だろうか。少女の成長物語でもある「萤火」は、相手への愛情を幾年も積み重ねたのに対し、学校といういつでも会える場所・螢が毎夏、山神の森に通ったように、かな子は毎日のように職員室に通って先生に会いに行くことで、短い時間の中で二人の距離が縮まっていく。

ただし両作品とも気持ちとどれほど通じ合っているのかわからないからこそ、主人公の少女に感情移入できるわけで、いたずらに似た作品だから云々という話には慎重になりたいが、感情が読めないキャラクターには惹かれていく主人公たちの物語という視点を得ると、緑川作品に通底しているテーマらしきものが見えてくるだろう。

もちろんそれは緑川作品に限った話ではない。恋愛物ならば、相手が誰に好意を寄せているのか、と感情を読もうと奮闘する少女たちの物語はいくらでもある。だから、もしその点で緑川作品の特徴を挙げるとすれば、あえて相手の感情を読めない設定にする、という点があると思われる。狐の面はその典型的な例であり、無表情な先生であり、後に「夏目友人帳」の妖怪たちの目

に発展していくことになる。

「あかく咲く声」の挿話は、その後川口が幸島にその面をあげる場面に続く。まだ小学生だった幸島は、夏祭りに誘われて川口に語る。「命はもろくて、すぐに消えてしまうから、はじめから触れなければ、失うこともないって」と父の言葉を引用する。川口は、その言葉が早くに母を亡くしたことを暗示させていることを察



し、ならば私を見ていればいい、と諭した。「命はもろい半面（注・原文ママ）とても強いものだよ」「一人になれてはいけないんだ」

2 恋はめぐる

「あかく咲く声」 視点から世界へ

緑川ゆきの作風の幅を大きく押し広げた作品が初単行本ともなった「あかく咲く声」（以下「あかく」と略す）である。「花泥棒」「珈琲ひらり」と、少女漫画誌での投稿作・デビュー作にしては、あまりに恋愛色の乏しい内容であるにもかかわらず、「あかく」ではあえて高校生の男女を登場させ、キャラクターにストーリーを合わせる一方で、キャラクターが意志を持って動き出す瞬間を切り取って見せた作品である。

ミステリーを基調とする作風として、まず事件物としての「あかく」を設定し、事件解決の手段としての不思議な力を持つ少年・幸島と、彼に心惹かれる少女・国府を置いた。脇には事件のサポート役として同級生の坂本と、警察の川口が配され、国府の周囲には幸島を快く思わない親友の会富を付ける。恋愛物として考えただけで、幸島と国府の間を妨げるものは、事件そのものであり、会富の親友への強い思いであり、そして幸島自身が持っている能力である。その能力とは、人を強烈な暗示に誘い込んでしまう声、である。既読の方には今更

あかく咲く声

緑川ゆき



あかく咲く声

緑川ゆき



「あかく咲く声」文庫版表紙

島と国府の関係は傍目から恋人に見えるけれども、お互いが特殊な声の効果を知っているために、本心をなかなか明かすことが出来ない。特に辛島は声によっていろんな人を傷付けてしまった過去がきっかけで無口だった。告白することそのものが躊躇われるほどの障壁が二人の間に横たわっているのである。「堂火」で、抱きつきたいけれど抱きつけない、という葛藤が思い出されよう。

な説明だが、この声が辛島の言動を制限し、彼に近づきたという動機そのものに煩悶する国府の姿を浮き彫りにしている。

つまり、辛島が「好きになれ」と言えば、聞いた子は好きになっってしまうということがある。辛



そうした設定にあって、「あかく」を興味深い作品として立ち上がらせたものが、辛島の声によって暗示にかかったキャラクターが見た風景である。舞い落ちる季節外れの雪にあって辛島が何気なく呟いた言葉、「まるで桜の花びらだ」。その場に居合わせて彼の声を聞いた国府と坂本は、俄かに桜の花びらになってしまった（見えてしまった）雪を目の当たりにする。きれいな景色だけれども、辛島自身には制御できない能力であり、彼自身は決して見ることが出来ない暗示にかかった人々の見る景色

1が描かれることで、辛島が抱える不安の大きさが読者に提示された。このような場面は劇中でいくつか描

かれる。キャラクターの視点を鍵に、それらを考察してみたい。

国府の視点

マンガのコマの中に描かれるものをどのキャラクターが見ているものか考えた場合、図2-1-1のように国府や坂本が見ている「雪」が「桜の花びら」に変わった瞬間は、辛島によって暗示を掛けられた全てのキャラクターの視点ということになる。この「雪」は、辛島にとっては雪ではないが、辛島が感じている雪は描写されることがない。そもそも「あかく」では、主人公の国府のモノローグが物語を支配しているので、他のキャラクターの心理描写は演出や国府の心理を通してほめかされる。

では、次の図2-2の場面をよく読んでみよう。ここは、国府が初めて辛島の暗示によって、手から流れる血を「赤い花びら」に見せられてしまうところである。左手からあふれる花びらは、実際には有り得ない現象である。辛島は左手から出血しているわけでもない（傷から流れた血を左手に付けただけである）し、風が吹



いているわけでもない。屋内の一室で、これから事件解決に怪我を押しつけて向かおうとする辛島を国府が遮ったところだ。



ここで図2-2の「前頁を見てみると、右に国府が、左に辛島が描かれている。ここでは、辛島が左から右に移



動しようとしているわけだが、暗示を掛けた場面では、立ち位置が逆転している。これは右から左に読むマンガの原則にのっとった経験的な技法である。つまり、右から左に移動するキャラクターは、視線の動きに沿っているのです、より一層早く動いて見える傾向がある、ということである。あくまで左から右に動くキャラクターと比べての話だけれども、物語の流れとでも呼び

得るものがあるとすれば、マンガの場合、それは右から左に流れていると言える。

辛島の左手から風にそよいで漏れる花びらは、まさにその流れに乗っている。立ち位置が逆転した瞬間からもうすでに暗示（劇中、フキダシの中にトーンが貼ってある台詞は、全て辛島の暗示である）は始まっており、彼の言葉と共に、彼の行く手を阻もうとする国府に向かつて物語の風がやさしくなびいている。

国府の視点はこの時、辛島が作り出した世界の中に立ち尽くしている。視線誘導を意識したコマ構成でも国府の周辺で何が起きようとしているのかを直視させる。視線の動きは花びらと同化し、国府の表情に行き着くだろう。

さてしかし、国府のモノローグ「辛島くんは軽く私をからかって」からわかるように、彼女はこの世界が作り物であることを理解している。暗示を掛けられたという意識が残ったまま舞い落ちる花びらを見つめる。これは、読者そのものの視点であることは言うまでもなからう。国府と一体化した読者は、彼女の言葉を素直に

受け入れる。黒く塗られた間白が、閉じられた空間であることを強調している。

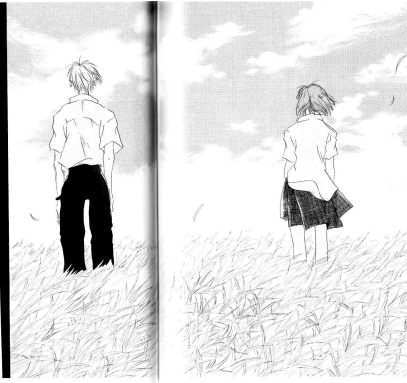
この場面に限らず、辛島が見せる風景は、図2-2のようにキャラクターの視線からはじまっている。特に表情が強調されている。暗示にかかった瞬間の顔であり、現実には有り得ない景色を見しまったことへの驚きも含まれているだろう。その後、場面はゆっくりと彼女の周囲の変化を描写していることから、彼女の感じる世界が目から始まり全体に広がっていく印象を強化しているわけだ。

視点から世界へ

コマの中には、国府の視点を出発点に彼女の世界が描かれていた。その世界は、しかし彼女が感じているだけであり、辛島とは共有することが出来ない。好きな人と同じ世界を見ることが出来ない、という苦悩は、国府というキャラクターが辛島にもっと接近したいという十分な動機付けになった。図2-1・2-2は、幻覚を見せられたのだが、これが段々と辛島の内面に近づいていく変化が見て取れる。視点↓国府の世界、そして

辛島の感じてしている世界の一端でも触れたい、という欲求である。

図2-1で坂本と見た桜の花びらは、雪を見て高校の入学式の日に見た桜を辛島が思い出したものである。単なる幻覚ではなく、辛島の感情が花びらに含まれている。直接言葉を交わさずに、国府は辛島の思い出に触れたわけだ。



原稿用紙の罫線が、人物の輪郭や草の質感を表現している。また、背景の空は、雲の描写が少なく、光の漏れが感じられる。

図2-3は、個人的に特に印象

深い幻覚場面なんだが、まあそれはともかく、

ここが本来どこなのか未読の方

2-1には想像できないだろう。国府

と辛島が立っている場所は、学校の中に過ぎない。廊下の窓か

ら豪雨が荒れる外を眺めている、これが辛島の景色である。ここで彼は、こんな夢を見た、と語り始める。それが図の場面なのだ。国府の世界が見聞きで画面いつぱいに広がる一方で、彼女は辛島が見た夢の世界にも足を踏み入れていた。世界の一部を共有しているわけである。しかも辛島は「夢で国府さんに逢ったよ」と語る。彼女の幻覚は、ひよっとしたら辛島自身が見た夢の一部かもしれない。これがどれほどの喜びか。控えぬ演進しながら、その後彼女の詩的なモノローグが二頁も続くことから察せられよう。しかもそのうちの二コマには、彼女が初めて体験した幻覚・赤い花びらが描かれている。「胸にあふれて 苦しくなるほど」という言葉から、彼女が辛島を好きになった時期・要因も想起できる。図2-2で零れ落ちた赤い花びらを彼女はしっかりと回収していた。

図2-4では、世界の共有がさらに一歩進められた。二人で夕焼けを見る場面である。辛島が「あかいね」と囁いた。元から赤い景色であるが、国府はそれが暗示によって赤く見えるのかどうか一瞬考える。けれども間違いなく言えることがある、二人とも同じ景色・同じ

色を見ているということだ。

暗示・制御できない能力という障壁が、思い出・夢・夕焼けと少しずつ崩されていく。図2-4より前に、二人が初めて手をつなぐ場面があるが、直接手で触れることで辛島と同じ空間を生き、さらに彼の思考を共有する・自分の思考が共有されることで、国府は辛島と同じ世界を共有した。それが、言葉ではなく、演出



図2-4

によって表現されている点がある。「あかく」の好きなところであるところであり、評価したいところであるところが、物語の締めくくりとなる二人の精神の共有までには、さらにもうひとつの試練である告白が必要となる。

世界の共有

緑川ゆきは初めての連載の中で、物語の発端から結末までも辛島の不思議な声という設定を手掛かりに、国府が感じる世界が次第に辛島と同化していく経験を演出で表現した。国府が見た赤い花びらの幻覚は、彼女自身が辛島への好意の中でひそかに育むことになり、劇中では、しばしば花弁や花そのものが画面の端々に描かれる。国府のモノローグ内に散りばめられるそれらを、読者は、真っ黒だったリトーンが貼られた色の不明瞭にもかかわらず、赤い花だと思ってしまう。タイトルの「あかく」は当然のこととし、赤という色が本作の中で印象的に用いられているからである。いわば読者は、作者の仕組んだ暗示にかかって幻覚を見ている、と言い替えていいかもしれない。白黒のメディアで色を感じるとき、読者は「あかく」の国府と同様の体験を現実にしている。



り花
散る
にれ
背め
さて、同じ赤を見
た二人を作者は
次にどう展開さ
せるだろうか。互



二人で

手は世界を辛島に見せよう、と府。いう発想に国。た。至ってもおかぐ。いた。繋いでくはあま手震え。

いの気持ちを確信しつつも、やはり不安がないわけではない。国府は、事件現場に駆けつけようとする辛島に「おやすみ」と暗示されて眠ってしまう。その中で彼女は夢を見た。赤い花がうずたかく積もった部屋の中に互いが埋もれてしまい、国府は雪崩に巻き込まれた辛島を必死に探す。辛島の腕が不意に現れた。「手」とさし伸ばされた腕。今まで辛島を追いかけてばかりいた国府が、夢の中で、彼は本当は救われたがっているのではないか、というのは個人的な感想だが、初めて手をつないだときの彼女の震える手を思い起こせば、事件に遭遇するたびに何度も助けられた経緯も含めて、彼が閉じ込められている自分では体験出来ない暗示の世界を共有したいと強く思うということ。彼女と一緒に見ようとした辛島と同じ景色を、今度は自分が見ている



た幻覚を辛島にも感じさせようとする。図2-15の告白で、辛島の目が



落とし、自分が見た幻覚を辛島にも感じさせようとする。図2-15の告白で、辛島の目が

告白の前に、国府の親友・会富と河原の会話が描かれた。辛島との交流は国府を不幸にすると考える会富に、河原は「その人と想いが繋がっていられるなら、つらいことも痛いことも、それはきつと不幸ではなくなるわ」と答える。同じ赤を見るという演出は、同じ想いで繋がるという意味であることがわかる。国府の告白場面は、これまでの幻覚と同様の演出がとられる。これは重要だ。辛島と対峙した彼女はまず、左手から道中拾い集めていた赤い花びらをこぼれ落とし、自分が見

アップされる。「ザアア」という風の音。辛島の抱える世界が、満面の笑みの国府によって迎え入れられた。彼は今、国府しかいない世界にいる。国府しか見ていない。国府の告白が、暗示のように辛島の思考を締めとってしまったかのように、彼は国府を見つめる。自分だけの世界から、二人の世界に広がった辛島の思考から、おそろくざりざりの選択で引き出された言葉だろう、否定も肯定もしない、ただ「好きだよ」と答える。

「あかく」は好きになることそのものが危ぶまれ、時には哀しみをもたらす可能性があった。辛島が警察の捜査に協力し続ける限り、刑事のような、犯人からの報復は常に覚悟しなければならぬ(本編では、実際に過去に逮捕した犯罪者から報復される挿話がある)、声そのものによってどんな災難が降りかかるかもしれない(激情に駆られた辛島が、「言「死ね」などと発すれば、聞いた人間は本当に死んでしまうだろう)。それらを乗り越えた上での抱擁、感動しないはずがない(と私は思うんだが、他の読者はどうなんだろうか)。この告白と抱擁は、後に「萤火」で洗練されることになる。狐の面だけでなく、抱きしめあうという想いを確認する

行為そのものが確実に事態を変えてしまうのだから、その悲しみの深さは「あかく」の比ではない。

「萤火」への道 恋愛色から恋愛モノへ

単行本「アツイヒビ」の柱書きで緑川ゆきは、「これはもう「やつ」と一度本気で戦わねば」と語っている。「やつ」とは恋愛物のことである。「あかく」はもちろん、それ以外の初期短編を眺めてみれば物語そのものを恋愛マンガとは呼べないものであることがわかる。コーヒーを飲んだら超人的な運動能力で大活躍(「珈琲ひらり」、人質になった四人の男女が謎の人物と協力して脱出を図る(「名前のない客」)など、事件物という趣が強い。恋愛要素もないわけではないが、添え物程度。「あかく」の終盤で国府と辛島の関係が描かれたとはいえ、物語の発端はやはり事件物だった。徹頭徹尾、恋愛色で貫き通す物語。「アツイヒビ」シリーズと呼ばれる、同じ学校を舞台にした一連の作品群は、それを目指そうとしたものである。

だが、まだ狐の面や無表情・妖怪の目という感情が読めないキャラクターの登場までには至らない。「寒い

日も。」では、主人公の遠山と、彼女が好意を寄せる池田（「アツイヒビ」の池田である）の両者の感情を隠すことなく描写される。つまり、遠山が思い悩む姿というのは、読者の感情を強く没入させるまでには至らない。池田の感情を描くことで、読者は二人の心のすれ違いを客観視させられることだろう。

作者が恋愛物として設定したキャラクターは、想う人がすでにいるキャラクター・池田である。この話の彼は「アツイヒビ」のような家族を大事にしようにする姿からは想像できない純粋な恋心を描かれている。家族以外にも大事なもの・友人が出来た池田は、それさえも壊してはならないと、国吉と室園（国吉の彼女。「アツイヒビ」では国吉と共に池田の殺人計画を阻止しようと奔走していた。池田は彼女への想いを隠し続け



寒い日も。

載るわけであ
収る）の関係
も。傍から見守
日ヒていく。遠
「寒い日は、そ
「アツイヒビ」
に惚れてしま

う。一方の池田は、室園への気持ちは解消できないままに、国吉とも接することになる。互いの気持ちは交互に描かれ、縮まりやうで縮まらない池田と遠山の距離感には、遠山の健気さによって救われる結末に至るものの、ハッピーエンドとはほど遠い青春の思い出のような物語に仕上がっている。「寒い日も。」というタイトルからも推測できるように、物語はまだ途中、という印象もある（実際は続編を描こうとして果たせなかった経緯があるらしいが詳しくはわからない）。

いずれにしても、「寒い日も。」の二人は、抱きしめ合うような劇的な場面もなく、実におとなしく苦くて、少し成長した二人のラストシーンにより、予感を残して終わるにとどまっている。

では、この作品が「螢火」に繋いだものはなんだろう。雑誌の掲載順では、「寒い日も。」と「螢火」の間には、長編「緋色の椅子」の二話目が掲載されているが、恋愛物の流れを俯瞰したとき、「あかく」の後半↓「花の跡」↓「寒い日も。」そして「螢火」と恋愛濃度を濃くしている様子がかがえるので、「緋色の椅子」については除外したい（「緋色の椅子」は中世ヨーロッパをイメージ

した架空の国を舞台に繰り広げられるある王国の物語である。)

演出について焦点を当てると、その流れが鮮明になってくるだろう。「あかく」のポイントは赤い花だった。花びらが舞う、赤く見える、ということがそのまま演出として少女の心象風景の一部として描かれ、彼女の気持が辛島に傾倒していく段階を静かに踏んでいった。幻覚として見た赤い花・その色が、現実の赤になり、やがて辛島の心にその色が浸透していくと、国府によって好意という花を開かせる。恋の象徴となった赤い花は、短編「花の跡」で、今度は実際に花の絵を描くキャラクターの登場により具体的な形を帯びた。

「花の跡」は、主人公である全日制の少女と、定時制の少年が、同じ教室の同じ机で授業を受けていたという偶然から始まる。机に描かれた花の絵の落書きが発端となり、互いの存在を知る。はじめからすれ違う理由が用意されているこの物語では、花の絵がほとんど画面を埋めていくことによって二人の感情を代弁する。

「花」は「恋」でしよう」と揶揄する主人公の友達が図らずも真理を突いていた。しかし、花の絵を描いた当の

少年は、それを花とは意識していなかった。少年は花に似た記号ともつかない何か（あれは「花」でも「絵」でもない。ポタリと落ちて、外側に広がっていくイメージ、と語っている）としか見ていないのだ。

この短編の山場も個人的に感動なんだが、終盤で少年は、それが確かに花の絵であることを意識し、そこから少女のあふれる感情を花の印象によって膨らませていく、あふれていく彼女の想いに彼は心地よさを覚えるのだ。けど、元からすれ違いが前提として進行した物語は、そのまま結末に至る。二人は抱き合うけれども、それは気持ちを確認した上での喜びという側面よりも、互いに二度と会えないかもしれないという哀しさのほうが大きい（だからこそ全日制と定時制という設定でもある。もちろんひよっとしたらまた会えるかもしれないという期待は残しておくのを忘れない）。

花は恋という具体的なイメージが固まると、「寒い日も。」では、少女マンガ特有の気持ちを表す背景に投影されていく。次頁上段の図は、空園が国吉についてときめきながら語る場面である。彼女の感情があふれて花を咲かせている。この花の印象は、しかし劇中、池田を

想う遠山にまでは反映されない。花から他のものに、変換されたのである。

それまでの作品の背景の演出として用いられたのがスクリーン・トーンである。学校を舞台としつつ、どこか田舎を想起させる風景が連なっている物語の世界でよく描かれる背景となれば空だろう。トーンを削って雲や日差しを表現するというのは、ごく自然である。下校の一面面ならば夕日を思わせるトーンが背景を埋め、日中ならば強い日差しが反射しているかのようにキャラクターを照らした。この光が、他の形に変わって心象



花 = 恋

風景を形成していくのである。「寒い日も。」では、五角形の反射光が、そのうち円形の雪のようなフワフワしたような形状になり、女の子のときめきなどの心理を浮き上がらせた。緑川作品の恋の心象

風景は、恋愛色のような具体的な物体から、なんと名も形状がたい円形の光・抽象的な景色へと変化することでも、少女マンガっぽさを獲得していったわけだ（もつとも、何をもって少女マンガと呼ぶかは個人差がある。ここでは、作者が想定したと考えられる少女マンガ像を心象風景の変遷を追うことで検証した）。



五角形の光からフワフワした光へ



3 心はめぐる

抱擁の修辞法

緑川作品の恋愛要素は特殊である。若い男女が知り合って恋に落ちる、作品はその過程を設定を変え発想を変え読者の興味を引き込みつつ、交際を始めてハッピーエンドとなるラストを飾るに映える場面とくれば、キスシーンだろう。けれども、緑川作品にはそれがない。驚くほどない。ぜってーここはキスだろう、というような状況でもキスをしない。

何故かと推理を働かせてみると、物語が主人公の心の動きを精緻に描いている結果だからだろう、という結論にたどり着く。少女たちが異性に求めるものは、触れ合いたい、という具体的な欲求だ。手を繋ぎたい、抱きしめたい、頬に触れたい。そういう思いが前面に出てくる。彼女たちの目的は、自分の気持ちを受け入れられたのかどうかの確認であり、行為は二の次なのである。「あかく」で国府が欲しかったのは幸島の本心の声だったし、「寒い日も。」も池田の気持ちの確認が重要だった。「螢火」は触れ合いたいけど叶わない究極の状態を用意することで、キス以上の深みを、手を繋ぐという単

純な行為に収斂させたのだ。

しかし、相手の気持ちを日常会話の端々や触れ合うという行動でしか確かめられないために、一種ストレスになるのも否めない。物語的には、カタルシスを読者に欲求させる契機になるのだから必要な・結末への溜めになるのだけれど、そこには読者の存在を前提とした作劇が施されていることを忘れてはならない。

男女逆転大奥として紹介されることが多い、よしながふみ「大奥」では、読者を想定した上で男女の抱擁を描いた場面がある、二巻二二八頁である(図)。女將軍として生きざるを得ない家光(一七歳の少女)と、大奥に無理やり入れられた元公家で僧だった有功(ありこと)が身を寄せ合って抱き合う場面である。抱擁そのものは、似た境遇に置かれた若い男女が心惹かれあった結果があるのだが、水面下には性差を超越した二人の人



「大奥」2巻228頁

越した二人の人のものは、似た境遇に置かれた若い男女が心惹かれあった結果があるのだが、水面下には性差を超越した二人の人



頁 230
抱擁
の
と
こ
ろ
の
傷
付
か
た
の
大
奥
に
人
に
身
を
寄
せ

間の物語・劇
中のナレ
シヨンに言
うところの傷
付いた雛が互
いに身を寄せ
合って感情

を、泣き声と共に解き放っているのである。ボーイズラ
ブ物を手がけているよしながにとって、男女の恋愛だ
ろうが男同士のだろうとか女同士であろうが、それは
結果でしかないということが如実に表現されている時
間でもあるが、それはともかく、抱擁の前に描かれた一
四頁にわたる家光の回想場面が肝要である。

彼女は家光の隠し子として密かに育てられていた。
けれども、国内を襲った謎の奇病により多くの若い男
性が死んでしまい、家光も災禍から逃れることが出来
ずに夭折する。元来女に興味のなかった家光が唯一残
した血脈が、幼い彼女・千恵だった。家光の乳母・春日
局は、今の將軍家を絶やしてはならない（他の徳川家
から將軍を選べば当然自分の立場を失ってしまう。春

日にとって家光の血筋は絶対なのである」と、彼女を
生家から奪い取って江戸城に軟禁し、家光の替わりと
して將軍に仕立てようと策謀をめぐらした。家光と
なった千恵は、城中で強姦され、子を宿すも赤子は生ま
れてまもなく死に、およそ女性として生きる上での不
幸を短い時間で経験してしまう。それは、彼女にとっ
て「女」を喪失するに十分な理由だった。男として・つ
まり將軍として彼女は生きるしかないのだった。

この回想は家光と読者のものでしかない。「大奥」は
これまで有功の視点によって語られていたが、ここで
一転する。付き人として大奥に入った玉栄の子猫
殺しの件にしても、有功は全て見抜いていたという述
懐によって、結局は有功の視点に引き戻される。江戸市
中で度々起きていた、女性の長髪が斬られるという辻
斬りめいた事件の真相も、有功により家光の差し金で
あることが明らかになってしまった。彼に知りようもな
い出来事は、彼の洞察や想像によって全て回収されて
いるのだ。このレトリックにより、物語は有功によって
全て解説され、描かれた出来事も全て有功によって解
明されているかのような錯覚が促進される。



か 有功は言
う、將軍と
して・男と
2を光
奥通なればなら
去家して生きな
「大のう
自の
らよ
の
と
つ
て、
幾

度も打ちのめされてきただろう、女としての自分を何
度踏みにじられてきたことだろうか。それらの出来事
を知った時、読者はまさに有功のごとき明晰さでもつ
て家光のこれまでの数々の悪戯・所業の動機を察す
る。実際に有功が知り得た事実は家光の笑いの空疎さ
にしか過ぎない。過去をあざ笑っているかのような家
光の描かれ方は、読者に強烈な印象をもたらずが、ここ
に有功の言葉が入ることで、家光の過去さえ知ったか
のような錯覚が起きる。もちろん、彼の語りによって察
せられた家光の過去は読者しか知らない出来事だ、少
なくともこの時点で具体的な出来事は有功の想像でし
かない。だが、全一四頁で展開された家光の回想それ自
体を察したかのような錯覚が、二二八頁目に収斂され

ているのである。

では「螢火」で読者が螢と共有している秘密とはなん
だろうか。具体的に見てみる。

初めてギンと出会った帰り道、螢はおじいさんと家
路に着く。おじいさんは山神の森について語った。森の
中から聞こえるお雛子に誘われた子供たちの話であ
る。「岩ちゃん達」が妖怪のお祭りに迷い込んだ、これは



達 終盤への足掛かりで
「岩ちゃん」 あることは言うまで
「岩ちゃん」 ちと もない。森の中しか知
「誰?」 らないギンにとって、

自分を企めて妖怪たちが人間からどう思われているの
かがうかがえるわずかな場面だ。

次に冬の場面である。劇中で描かれた夏以外の季節
がほぼ真ん中に置かれた。実際には十年は経過してい
るだろう物語だが、出会いの夏と別れの夏の間に冬を
挟むことで、季節が一巡りしかしていないかのような
演出が施されている。季節の移ろいをぱっさり切り捨
てることで、短編にありがちな忙しい展開が緩和され
たのである。同時に、夏を待ち焦がれる螢とギンの表情



冬に逢えないギン

がここでは重要だろう。堂は同級生と思しき男子に手を取られて凍った道を歩く。彼女がギンに

ンに触れたい気持ちを高ぶらせる状況である。堂の「ありがとう」という顔のアップの間に手を触れ合うコマが入る。何気ない一瞬が堂には遠い現実であることがギンの設定から想像できよう。叶わないからこそ思いが強くなる。偶然かどうかわからないが、ここでふわふわと舞う雪の描写が、高校生になった堂の周辺にきらめく好意をほのかす円形の光に繋がりに、後に触れれば消えてしまう形容として「雪のようね」とも語る。男子と触れ合うだけではなく、雪を見るだけでも堂はギンを連想してしまふ。この図の場面は、すでにギンへの恋心を読者は確信した上で見ていることになる。

登場人物がほとんど二人のために、二人が想い合うだろうことは容易に知れる。けれども、その過程において

て触れ合えない関係という障害、さらに夏にか会えないという制限を加えることで物語は緊張感を保っている。だからといって闇雲に障壁を除しくしても意味がない。作者が仕掛けたミスリードは、それと気付かないほど巧妙である。

妖怪の夏祭りに堂を誘ったギンは、自分の短い生い立ちと妖怪でも幽霊でもないあいまいな存在としての自分を語る。それはまるで、堂の気持ちに応えたかのようである。もちろん堂の好意はそれまでの交流から十分に伝わっているはずだし、仄めかす台詞だつてある。特に高校卒業したらこの近くに越してきて毎日会おう・冬の間もギンのことを考えていたと言う堂の言葉は決定的である。けれども、ギンはいつ堂の気持ちに気付いたのか、と考えてみると、途端にあやふやになつていく。

予想される展開や期待、堂のギンへの想いが、ギンも堂に好意を抱いているという思い込みを生んでいるわけだが、夏祭り二人の目に見える関係の変化が狐の面だ。

面を被るギンと素顔の堂、これが夏祭りで逆転した。

螢の表情がすっかり隠されることになり、ギンの顔が描かれ続ける。螢がギンの決意を察したかのようなモノローグが続く、「きつこれが最後の——」

ギンのほとんど告白の言葉でお互いの気持ちは通じたわけだが、それを妨げていたものがお面だった。これが螢に被らされることにより、ギンの心が明け透けになる。序盤の山場・落ちる螢を受け止めない↓終盤の山場・祭りで転びそうな子の手を思わず掴んでしまう、というギンの変化は、そのまま人間に対する気持ちの変化とも読めなくはない。かつて螢は、私といるときは面を外して欲しいと頼んでいた。ギンはそれに意味があるのか、と問い返し、螢は別に意味はないけどと言いついで泣いてしまう。だが、人間への恐怖とも取れる面・それを付けていれば、誰もが幽霊だ妖怪だと怖がって避けてくれるのだから、ギンが螢に逢いたい想いを「人込みをかきわけてでも」と形容した台詞は、螢を通して人間と触れ合いたいと思うようになっていったわけである。

ギンは面を外す意味を、自らが外して螢に預けることで理解したのだ。

溢れるギンの感情

二人の抱擁場面は、ふわふわキラキラした円形の光に満ち溢れている。この光は、すでに書いたとおり、キャラクターの好意かそれに近い感情を表すものである。どのような場面でこれが描かれていたのかを見ていくと、前節であいまいなままにしておいた、ギンが螢に好意を持ってしている状況を想定できる。それがギンの視点である。



円形の光は、螢がギンに初めて会ったときにも描かれていた。迷子の自分を助けてくれたギンに、螢は目を

ぶ輝かせて頬を少し染める。だが、この時のギンは背を向けており、螢を見ていない。よってこの光は螢の心象景色だとわかる。頁をめくると、感激のあまりギンに飛び付き、光はハートマークに変化、あっさりとギンに棒で

叩かれて拒まれてしまう。彼女自身整理できない小さな恋心である。

だが、ギンを怖がらない螢は、ギンにとって特別な存在にあっていう間になってしまふのである。人への関心と恐怖が表裏一体になった彼の心は、螢を正面から見つめる場面で早くも円形の光が現れるのだ。

螢が名乗る場面。やや顔を上げる彼女の全身にきらめく光は、ギンの視点である。これをギンが彼女に惹かれた瞬間と断じるのは早計だろう。けれども、ギンが螢を通じて人間に興味を持ったのは確かである。これまで妖怪としか付き合いがない彼にとって、かつて自分を捨てた親への複雑な感情が消えることはない。緑川作品で、おそらく最大の愛情表現と思われる抱擁の



記憶がないギンが、螢に何らかの希望を見たとして、不思議ではない。この光は、人



間へのときめきがあるのかも。しれない。

次に中学生になった螢を見るギンの視点である。花びらのようなものが舞っている。光っぽいものも見える。螢がギン

頃としての心理なのだが、ギンの見ているものとして捉えると、螢が女に見えるのと話すギンに繋がっていく。そして、自ら面を外したギンは蝶と戯れる(ラストで螢の元にやってきた蝶と対を成している。また、「夏目友人帳」のニヤンコ先生に



友人帳」のニヤンコ先生に蝶は受け継がれている。そして、高校生になった螢では、最初から光が輝いている。

しかし、そうは言ってもそれらのキラキラは螢の気持ちを表現したものに

変わりはないだろう。このような視点は、作品の穿った見方につながり、独りよがりな分析に陥らないとも限らないけど、この視点によって作品を見渡していくと、客観的にキラキラが描かれたコマだけに法則性があることに気付かされるに違いない。

面を被ったキャラクターにはキラキラが描かれないのである。

図3-2はギンが面を堂に被せる場面である。お面越しとはいえ、緑川作品中数少ない貴重なキスシーンだ（肩をすくめたような堂がかわいい）。このコマと図3-1の左下のコマは頁を跨いで・めくることによって繋がっている。1コマ目（図3-1）はキラキラだけが浮かんでいる場面だが、これは誰の気持ちを表したものでしょうか。



図3-2

目の前を一瞬ふさがれた堂のものだろうか。2コマ目（図3-2）に目を移すことで、それがギンのものだと思いがつくはずだ。堂に

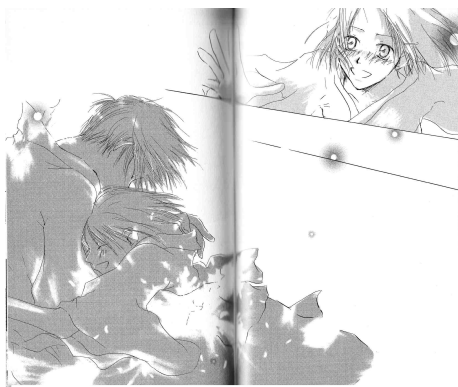
やや体重を傾けて唇を当てるギンの動きに合わせるように描かれたキラキラ。花火の明かりにまぎれていたかのような心のきらめきが、面を外したギンから溢れていく。

抱擁場面に至ると、ギンは全身から光を発するかのように・あるいは雪のような輝きを画面に敷き詰めていく。キラキラが散乱し、「来い」堂からのギンは消えゆく身体から気持ちだけが霧散していった。面を付けた堂にはキラキラが描かれていない。表情も気持ちも面によって覆われている。そして、めくり効果に合わせた面を外した堂の満面の笑みからは、抑え込まれていた彼女の気持ちキラキラとなってギンに飛び掛っていくのだ。



図3-1

キャラクターの動きを流線ではなく、キラキラで表現しているのである。前述のギンがキスした時の身体の



二人の抱擁

動きよりも一層くつきりと、読む視線に合致させ、見開きを大まかに三コマに区切った蛍の正面から真横への構図の移行もスムーズに、面による隠された顔と触れ合えないという二つの障害を一気に乗り越えた刹那を、真夏の中で溶けていく雪のように描ききってしまった。

ギンの心は、蛍の胸の中に忘れられない記憶として、狐の面と共に仕舞われたのである。蝶はギンの居場所を知っているかのように蛍の元にやってきた。

その後の「萤火」

さて、「あかく」から「萤火」までの大まかな流れの中

で見えてきたいくつかの変遷と作者の飛躍を考えてきたわけだが、「萤火」で収斂した作者流の恋愛物は、その後どのような経過をたどって行ったのか。赤い花、花びらのような具象から、円形の光のような抽象的表現の獲得、抱擁を特別視する物語。実は「萤火」が変えたものはまだある。

それ以前の作品に登場したキャラクターは、ほとんど苗字でお互いを呼び合っていた。「萤火」から、互いを名前で呼び合うようになり、その後の作品は苗字・名前にこだわらずにキャラクターが描かれていくことになる。その苗字が、作者の地元（熊本）の地名から取られていることは、ファンの間では常識であるが、蛍の苗字・竹川も例外ではない。

熊本県球磨郡五木村は子守唄の里で知られている。村の中心を流れる川辺川に連なる椴原川との合流地点の付近に竹川（竹の川）という山間の小さな地区がある。一〇〇メートルを超える山々を抱く五木村は、夏になるとほたる祭りが催されるなど自然豊かな村だ。作者にとって「萤火」の背景には、おそらくこの村が想起されていることだろう（五木村の村の木は椿であ



る。冬の一場面として描かれた上図の花は、おそろく椿だと思われ、ここからこの村が「螢火」の舞台であることが推測できる。

さてしかし、川辺川には長らく未着工のままの

ダム建設予定がある。根強い反対運動があるものの、五木村は現在建設に向けた各種工事が進められており、ダムが完成すれば村のほとんどが水没してしまうと言われている。二人が釣りをする場面を見てほしい。水の中に鳥居らしきものなどが沈んでいるのがわかる。実



塔れ石か
や描居が
鳥はも
にさ
下し
面思
水と

はこの物語には、いつか消えてしまう村の物語が埋め込まれているのである（半分妄想です）。

「螢火」の冒頭で読者に強く訴えられた景色は、暑い夏・緑に囲まれた山々である。それが中盤以降、その印象を刷新していく。釣りの場面の前にギンが自分について語る場面がある。ここで描かれたものは水面だ。空や雲、木々に被さっていたキラキラターやモノローグに、水を印象付けるかのようなトーンを配していく。強烈な日差しによって作られた影が、水面の底深くを思わせる黒さになったのである。



夏祭りの場面（左図）になると、水のイメージは確かなものとなっていく。ギンが消える予兆としてのあやふやなトーンとも捉えることができるけれど、素直に読めば、これは間違いなく水である。泳ぎ回る金魚は、もちろん金魚掬いだけども、夜の涼しさを感ぜさせる黒さの薄れた

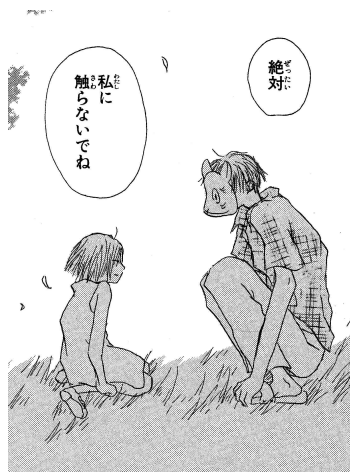
景色は、そのまま闇に舞う螢の光であり、冬の雪であり、消えていく村なのかもれない。

面をもらった螢のモノローグになると、水面までが意識に上ってくる。水面に映る夜空、そして小さな波紋。最後の夏とは、村にとつての最後の夏でもあった。

このような読解に至るには訳がある。「夏目友人帳」第四話が、まさにダムに沈んだ村を舞台にしていた。

「ダム底の燕」という副題のこの挿話は、死んだ燕が主人公の夏目の元を尋ね、かつて世話になった人間に礼がしたいので協力してくれ、という発端であるが、そもそもそのような展開になったのも、水不足によって水位が下がり、水の底だった村の一部が姿を現したためだった。作者はあとがきで語っている、「割とダムについては身近に話題になる所に住んでいたの」と。

干上がったダムは、しかしまた降り始めた雨によって少しずつ水位を上げていく。水の底の妖怪たちは、いずれ消えてしまう自分たちを知りつつも、祭りを営んでひと時を楽しもうとした。ひよっとしたら、この祭りにはギンの友人である妖怪たちも参加していたのかもしれない。



あとがき

私が緑川ゆきを知ったのは、二〇〇一年頃だったと思う。今はもう閉鎖してしまったマンガ等をレビューしているサイトで「あかく咲く声」がなんとなく面白い、というような微妙な評価で取り上げられていた。当時はアフリーエイトはなかったが、スキャンされた何巻かの表紙が私の心を捉えた。

本屋で全三巻を購入、少女漫画にまだ抵抗があった時期だったが、白泉社版一卷四二頁（幸島が血を赤い花びらに見せてしまう場面。図2-2）を契機に、作品のジャンルなんや関係なしに物語に引き込まれた。以来、私は緑川ゆきという作家の名前を心の片隅にとどめることになる。

その存在が大きく輝きだすのが「アツイヒビ」だった。ああ、新刊出してたんだと気付いたときにはすでに秋だった（単行本が出たのは梅雨前の頃）が、表題作「アツイヒビ」は、緑川ゆきの名を心のど真ん中に据え置くほどの衝撃だった。

作者のミステリー好きは単行本の柱書やあとがきから察せられていたが、恋愛物とそれが融合すること、

ああそうか、人の気持ちを探るってことも恋愛の一要素なのか、と少女漫画への偏見を振り払えた延引にもなっていると思う。今、くらもちふさことか西炯子とかわびことか、夢中になりつつある作家が増えているのも、私にとっての始まりは緑川ゆきだったろう。

「夏目友人帳」が今夏アニメ化されたことで、緑川ゆき関連のキーワードで検索して当サイトを訪ねる閲覧者が増えた。その方々の一人でもいいから、「蛍火」を手にとってほしい。また、まだ「蛍火」を読んでいないというのならば、ぜひとも読んでほしい。2ちゃんねるのレスを引用したのも、読後興奮していたのが私だけではないことを伝えたいがためである。

最後に、緑川ゆき非公式ファンサイト「あかい花」(<http://redflower.michikusa.jp/>)のデータベースや五木村と「蛍火」の関係の記事がなければ本稿は書けなかったと思う。改めて感謝したい。そして全ての緑川ゆきファンとこの文章を読んでもくれた人に、赤い花を。それはきつと――